

指導者に対するアンチドーピング活動における現状と課題

山元 征也 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)

指導教員 黒須 朱莉

キーワード：アンチドーピング活動，指導者，高校の運動部活動

1. 緒言

ドーピングは、スポーツのフェアプレイ精神に反し、競技者の健康を損ね、人々に夢や感動を与えるスポーツの意義を失わせ、悪影響を及ぼすものである。運動部に所属する高校生の大半は、所属する部活動の指導者からこのドーピングに関する情報を得る場合が多い。では、アンチドーピング教育の責任を担う立場にある指導者に対するアンチドーピング活動には、どのような現状と課題があるのだろうか。高橋ら（2013）は、高校生とその指導者を対象とした意識調査で、ドーピングに関する情報を伝達する道筋を作ることの重要性を指摘しているが、その具体案は検討されていない。そこで本研究は、高校の運動部の指導者に対するアンチドーピング活動における現状と課題を明らかにすることを目的とし、指導者に対するアンチドーピング活動における改善策を見出すことを課題とした。

2. 研究方法

WADA, JADA によるアンチドーピング活動全体の内容、日本のドーピング違反の実態を調査した。次に、S 県の高校のライフル射撃と陸上部の指導者 2 名に半構造化インタビューを行った。両部活動はインターハイに出場する競技レベルにあり、ドーピング検査が実施される国体に選手を輩出する可能性のある部活動である。

3. 結果と考察

まず、WADA, JADA が取り組んでいるアンチドーピングの活動内容から、指導者に向け

た教育啓発活動や研修会の実施、禁止薬物リストの提示などが行われていることがわかった。また JADA の活動にはドーピングの専門家であるスポーツファーマシストの養成があった。

次に、日本のドーピング違反の事例から、選手の体調や状態を指導者が把握できておらず禁止成分を摂取してしまうことが多いことがわかった。よって、運動部活動の指導者にはこの「うっかりドーピング」を防ぐための具体的なアンチドーピング活動と教育が課題であるといえる。

そしてインタビューから、国体レベルの選手を輩出する可能性のある部活動であったとしても、指導者によってアンチドーピングに対する意識や教育の内容に差があることがわかった。具体的には、陸上部の指導者の方が高いアンチドーピング意識であった。この点は、肉体的強化を促す禁止薬の使用比重が陸上競技の方が高いため意識に差が出たのではないかと考えた。また、スポーツファーマシストの導入については、両者とも必要性は感じていなかった。学内業務や技術指導が中心となり教育したくてもできない環境にあることも明らかになった。以上のことから、指導者に研修会や教育会への参加を義務付けるだけでなく、ドーピングの専門家であるスポーツファーマシストと運動部活動の連携を図ることがこうした現状の解決に繋がるのではないかと考えられる。

引用・参考文献

福島美穂（2013）ドーピング問題の現状と課題，教育学研究科紀要 35：361－367。